

「私はイギリス人」

マヤは自分のことをイギリス人と思っています。夜、寝床で母親に本を読んでもらうのは心地よい特別な時間なのでしょう、父親でもその部屋には入れません。

「ダディ、この部屋が日本人用にみえる？」ときついことを言いました。

「見えるよ。畳も布団もあるものね」

柔道愛好者たちのためにイギリスでも畳が売られているそうです。それを床に並べ、布団を敷き、マヤの寝室は日本風なのです。

「ううん。今、ここはイタリア人とイギリス人 (British) 用の部屋なのよ」

自分は英語を話すからイギリス人、母親はイタリア語を話すからイタリア人、このように思っているようです。なるほど！ 私は日本人だから日本語を話すのではなく、日本語を話しているから日本人になっている、という考えもあるなあ、と思いました。尊敬や謙譲の言葉が多い日本語を話しているうちに人間関係の上下に気を使い、控えめな日本人になってしまっているのかもしれませんが。そういう私が英語に切り替えて話すと、本当の自分より元気で威勢がよくなっていることに気づき、違和感をもってしまいます。それでも英語としてはまだ「日本人」を引きずって、「威勢の良さ」が足りないのですが・・・。

人間関係・自己成長のセミナーを行う「mana レインボー」というグループの主宰者である松尾直子さんという方が、ニューヨークに留学時の思い出を『朝日新聞』に書いておられました。

「日本人の友人と話していても、意見がちがうときは、自然と英語に変わった。日本語ではケンカになりそうな話も英語だと言いやすい。違いを恐れる日本と大事にする米国。文化の差が言葉にも織り込まれているようだ」

イスラエルに数年住んだ経験のある友人が言いました。

「私が経験した日常会話では、ヘブライ語には『妻』という言葉が無いのよ」

「え？ my wife と言いたいときは何って言うの？」

「英語で言うと、“my woman” よ」

「じゃ、『あの女の人』って言いたいときは？」

「それは “that woman” よ。」

これにはびっくりしてしまいました。もう一人の友人も言いました。

『家内』とか『奥さん』、『女房』、日本語には言い方がいっぱいあるわね。みんな家の中にいるというイメージね」

古い時代のユダヤでは女性は男性と対等ではなかったはずですが、woman というような言葉を日常用語として使っていたら、「妻」の意識は私たち日本人既婚女性とどこか違ってく

るはずと思いました。

「そうよ。奥さんたちは旦那さんに負けていないわよ。堂々としているわ」

(以上 律)

娘と婿のウリ（ドイツ人）とわれわれ夫婦が一夕食事を共にしました。ドイツでは、一時期民族の純潔を唱えて極端な人種差別がはびこったけれども、戦後その反省があり、1968年以降は多様な意見が並立することを良しとする社会ができ、社会民主党が第2党になったり、緑の党が第3党になったりして政権与党の一角に食い込んでいる。日本社会が保守党の一強政権を継続していて、最近ますます戦前の近隣諸国に対する独善ぶりが復古してきたのは、歴史的な思想の底流に大きな違いがあるからではないか、という話になりました。

西ヨーロッパ社会には、二つの権威があります。神（教会）の権威と、世俗（政治）の権力です。イタリアのシエナという町はフィレンツェから列車で1時間ほどの距離にあり、フィレンツェ同様にルネッサンス期に栄えた町ですが、今もこじんまりした美しい石造りの町に人々が豊かに住んでいます。その町のひとつの丘には大きな教会があり、もう一つの丘には大きな石畳の広場（カンポ）に面した市役所があります。どちらにも遠くからよく見える高い塔があって、町のシンボルになっています。そして、人々は両方の塔の高さを同じに保っています。つまり、教権と俗権との二つが必要で、どちらの力が優勢になっても世の中がうまく行かないと理解しているのです。

日本には権威が一つしかありません。天皇です。天皇は精神の権威でもあり、征夷大將軍を任命する政治権力の根源でもあります。昭和天皇は、東條英機を中心とする軍部の内閣を任命して開戦を“聖断”し、敗戦後はマッカーサーを“征夷大將軍”として正当化して¹、みずからの権威を保ちつづけ、国民も素直に天皇の決定を受け入れてマッカーサー將軍を支配者として恭順しました（マッカーサー司令部は日本へ乗り込む時に、激しい軍事抵抗を予想して緊張していたが、日本国民はあっさり支配を受け入れ、むしろ歓迎すらしめた）。律子の父親は、明治生まれの牧師の長男だったのですが、戦前戦中を通じて、周りの人びとから苦汁を呑まされてきました。1945年9月にマッカーサー元帥が進駐してきからわずか4カ月後の12月末に、日本の街々にクリスマス・ツリーが飾られ、人々がクリスマス・ソングをうれしげに歌うのを聞いてひどい嫌悪感を懐いたそうです。

「国体」は揺るがず、靖国に参拝する権力者が国民の共感を勝ち得るのがわれわれの社会の構造なのですね。天皇は常に勝ち馬を権威づける役目に徹してきたので、失敗するこ

¹ 白井聡『国体論 菊と星条旗』集英社新書、2018年。

ちなみに、筆者はこの本の Amazon Review を次のように書いた。

「ポツダム宣言の受諾に際して最後の留保として試みたことが「国体の護持」であった。今上天皇が「国民統合の象徴」という役目を責務として捉え、その義務を自己に課しておられた結果が強い「退位の意思」であった。マッカーサーは征夷大將軍として日本の歴史の一齣を担った。それほど日本の社会の根底にしっかり根付いている「国体」を戦後雲散霧消したかのごとくに忘れ去っていたことが、思い違いだったことを、しっかり喚起してくれた素晴らしい名著である。」

とはなかったのですね。世俗の統治には、すべての国民を満足させることはできません。政治はゼロサムの利害関係を調整する作業ですから、何かを決定すれば受益者と不利益者が発生します。したがって、不利益者が心理抵抗を和らげることのできる心理装置、つまり権威が必要です。そのためにはどうしても人間社会の地平より一段高い神の支配を要請することになります。天皇制は神道と一体になって、過去 2000 年近い年月を破綻なく統治してきました。(唯一失敗したのは、後醍醐天皇のように自ら世俗権力を握って直接統治に乗り出したときだけでした。) これが「万世一系」という長続きの秘訣ですね。

天皇が政治権力の正当性を裏書きする社会では、民衆が政治上の意思決定に参画することは歓迎されませんね。民衆は天皇の神権行使をありがたく受け入れることだけが求められているのですね。私が京王線沿線住民の地下化運動をサポートする本を出版したとき²、国土交通省や東京都建設局の官僚たちが、地元住民たちの意見を聞くことなく独断的に計画を進めていることを批判しました。そうしたら、この運動の指導的な人たちから「わたしたちは中央政府や都の行政担当者たちを批判する意図はない。ただ、騒音を無くしてほしいと懇願しているだけだ」と言って私をクビにしました³。つまり、市民が天皇から権限を委譲された行政官と対等に議論をすることは僭越であり、私が主張したことは一步退いて下段から上段を見上げて嘆願しなければいけないという序列意識に反したということのようでした。原稿中の「市民」という言葉もいけないと言われて、「住民」と書き改めました。つまり、天皇の権威によって日本は治められているのであって、民が主人公であるという「民主主義」は根付いていないようです。

(以上 哲)

² 海渡雄一さんとの共著『沿線住民は眠れない』緑風出版、2018 年

³ 「“NO”を言わない道徳教育」『筒井新聞』第 335 号 (2)

<http://tsutsuinews.html.xdomain.jp/335/335-2.pdf>